

**第5回
全国草原シンポジウム・サミット
in 阿蘇**

報 告 書



平成14年3月
第5回全国草原シンポジウム・サミット実行委員会



目次

開会あいさつ 実行委員長代行 井 信行	4
基調講演	
阿蘇草原の復活に向けて～草原の多面的価値と新しい活用の方向～	5
師／高橋 佳孝（近畿中国四国農業研究センター畜産草地部）	
各地の報告	
島根県大田市	7
第2回草原シンポジウムサミットが三瓶にもたらしたもの 発言者／高橋 泰子（島根県大田市 緑と水の連絡会議）	
岩手県岩泉町	9
復活した安家森かぬか平の林間放牧～短角牛によるふるさとの森の景観保全への取り組み～ 発言者／轟村 明美（岩手県岩泉町 安家地区活性化推進協議会自然部会）	
分科会	
第1分科会「草原の活用活性化への新たな取りくみ」	10
第2分科会「このままじゃ牛もおらん 人もおらん！」	14
第3分科会「パートナーシップによる草原の維持」	20
第4分科会「考えよう！草原の様々な機能と利用」	23
第5分科会「草原に関する行政の取り組み」	26
分科会報告会	30
サミット及びサミット宣言の採択	31
プレイベント、交流会、アフターイベント スナップ	34
「阿蘇の草原」歌詞募集の結果報告	36
阿蘇の野焼き（「九州のムラ」11号より抜粋）	38





実行委員長代行 井 信行

一千年の営みが作り出した人類の遺産、阿蘇をともに守りたい。

ご紹介いただきました地元阿蘇で農業をやっております、井でございます。本日は第5回全国草原シンポジウムサミット阿蘇を開催いたしましたところ、県内はもとより全国各地からこのように大勢の皆様にご出席いただき、盛大に開会できますことを心より御礼を申し上げる次第であります。平成7年3月大分県久住町での第1回全国野焼きサミット宣言に「本サミットを契機として、日本各地の草原を有する自治体間の交流の輪を広げ、連携を密にしていこう」とあります。その後、第2回鳥取県太田市、第3回北海道小樽町、第4回山口県萩市で行なわれてきました。

今回、私たちもこの宣言の精神を引き継ぎ開催いたしました。全国一の規模を誇る阿蘇の広大な草原景観は、1千年に及ぶ、放牧、採草、火入の歴史が作り出した人類遺産と言われております。しかし、かつて見渡す限り草立があった草原景観は、植林や管理不足による灌木化が進み、変貌しようとしています。

今日、阿蘇の草原は、放牧などの畜産利用だけでなく、水源涵養や国土保全、希少植物等の自然保全、観光としての景観など多面的な機能が評価され、その重要性が議論されています。私が20代の頃、今から40年前には阿蘇に暮らすほとんどの人々が農業に従事し、草原と牛と人の三者が密接につながり、連鎖が循環しておりました。現存、農業担い手不足が大きな要因となり、この循環が機能しなくなりつつあります。

さて、草原は誰のものか、そして草原は誰が守るのか。この問題を抜きにして草原の未来は話されません。阿蘇の草原は地域住民のものであるとともに国民全体の財産でもあります。では、誰がそれを守っているのか。今日まず直接に、しかも日常的に草原を守っているのは地元の畜産農家であります。これを第1者とします。第2者として畜産農家を取り囲む地元住民で、その多くはかつて牛を養い、古くから草原に関わってきました。今も折々には草原維持のため作業に参加しています。また彼らを取り囲むように、地元自治体、畜産関連団体があります。しかし、各種団体はそれぞれ問題を抱えています。第1者は畜産の慢性的な担い手不足を背景に、絶対数が減少しています。第2者についても、兼業化の進む中、時間的余裕を失いつつあります。このままでは、これまでと同じような草原を維持していく

ことは難しくなってきています。畜産振興を柱に、地域の体制を立て直し強化していくことが必要であります。

一方、近年自然に対する意識の高まりから外部からの草原維持に対する協力者が増加しつつあります。この人たちを新たな力として位置付けていくことが必要であります。しかし、ボランティアの力を借りるとしても、草原の規模に対し、質量共に限りがあります。まず私たちが地域に常時暮らすものが主体性をもって、草原環境の維持にあたり、そのう足りない部分をこの人たちに委ねることが基本的な方向ではないかと思われまふ。

今、国全体がBSE問題で大きく揺れ動いています。早期解決なくして日本の畜産業は激減の恐れがあります。BSEは輸入された汚染肉骨粉が発生原因として疑われています。家畜のエサを海外に依存した日本の畜産のあり方が問われていると思います。私は仲間と20数年前から阿蘇の恵まれた草資源を活用した牛飼いに取り組んでいます。草で作る肉用牛が今、全国から注目されています。草資源を活用した草地畜産・安全・安心をアピールし、消費者に信頼回復を図り、消費拡大に結びつければ、必ず草地畜産経営の安定は図れると思います。草と牛、牛と人、村人と都市住民、互いに結びつけば、草原や牛、自然と共に暮らしかある山村集落村は必ず活性化されると思います。したがって、草原は永久に維持され、草原と共に存続あるものもろの問題を解決できると思われまふ。

今こそ阿蘇の草原、日本の草原、草地畜産の出番ではないでしょうか。都市住民の皆さん、草原牛肉を買ってください。農家の皆さん、牛を殖しましょう。

ともかく、現実の状況は激しく動いており、しかも急を要しています。阿蘇の草原を維持守るため、心ある方々が広く、全国から参集していただき大変感謝しています。共に考え、共に行動しながら、新たな共生の道を見つけていきたいと思ひます。本日はどうもありがとうございます。



基調講演

阿蘇草原の復活に向けて

～草原の多面的価値と新しい活用の方向～

師／高橋 佳季

(近畿中国四国農業研究センター畜産草地部)

持続可能な農業と畜産の循環システムを
阿蘇から全国の草原へ

今回のこの基調講演は、実行委員長である大滝典雄先生の強い要望によって実現したのですが、大滝先生との出会いは第1回の久住町のシンポジウム・サミットが最初であり、その後も大滝先生に何度か阿蘇を案内していただきました。また阿蘇の状況をいつもこと細かくご報告いただいております。今回の講演は個人的にも非常にうれしい機会を頂いたと思っております。

さて本題に入りますが、草原というものは人の生活との結びつきが非常に強く、人的な活動がないとほとんどの草原は維持できません。また、牛との結びつきも非常に強いということが言えます。草原には放牧地と採草地とがあり、放牧地では牛が草を食べ、排泄し、その排泄物を肥料にまた草が伸びる。採草の草は、牛の排泄物を通じて農地を肥やします。この2つの循環システムがあるわけです。

草原は文化的遺産です。茅葺の家は2mぐらいの茅を使いますが、こういった茅は冬場に取ったりしていたようです。また、土塁や石塁によって採草地と放牧地に分かれているところがありますが、これは採草地の方に牛が来ないようにするための昔ながらの知恵、文化なんです。

草原にはオミナエシ、ナデシコなどの筈花が咲きますが、これは秋の七草と言われ、日本人の情緒を育んだ生活文化や原風景が草原にはあります。逆にこのよ



うな草花は私たちの先祖の歴史を背負って、今も存在しているとも言えるわけです。

次に、草原は豊かな空間です。阿蘇地域には年間1700万人の観光客があるとされます。その、草原の3大技術は、「野を焼く」「牛を放す」「草を刈ってそれを運んで使う」ことなんです。この3つのかく乱要因によって草原は維持できるのです。これは非常に優れたシステムで、ほおっておけば木が生えて森になるんですけど、そこに火を入れて、牛を放し、草を食べさせることによって、草千里のような草原ができる。しかし、これをやめることで元に戻るといった可逆的な要素も持っています。

一方、火を入れることで草原は若返ります。火を入れないと草原は枯れ草をためていって、土地は肥えていくかもしれませんが、草花の成長を妨げたり、あるいは土壌がひ弱になりかえって土砂崩れを助長したりします。火を入れることでハルリンドウやキスミレといった小さな草花が花を咲かせ、美しい景観を作ります。

もう一つの技術は放牧です。ツツジなどの牛が嫌う有毒植物が成長しており、非常に珍しい植物が育っています。また、牛たちが食べた草の跡は日本庭園のような造形美があります。そして、牛が通った後の排泄物に、非常に珍しい昆虫類が分解者として発生してきます。西日本では阿蘇にしか残っていないのではないかといい昆虫もいるのです。これも豊かな牧野の生態系と言えるでしょう。牧歌的な明るい風景も豊かな環境であるといえるでしょう。草原や芝は視覚的な評価が非常に高いのです。

しかしながら、いま草原は失われつつあります。草原そのものが希少価値を持つほどに減少しており、国土面積の1%以下になっています。農耕が盛んだった時代は10%ぐらいだったことから見ても、このような二次草地としての草原がなくなっていることがわかります。

もし国立公園や国定公園などにある草原が守られれば全国の20%の草原は守られるだろうと言われております。それだけ国立公園などの草原を守ることが大事になってきているんですね。



もう一つ失われているのは、草原に生息する動植物です。あるいは里山など、私たちの身の回りに当たり前にあったものが失われようとしています。ここ最近では、秋の七草であるキキョウが、1997年に環境庁がまとめたレッドリストに絶滅危惧種として上げられています。

けれども、草原の価値は見直されてきています。例えば、西日本では秋吉台や阿蘇くじゅう公園、平尾台などの自然公園が草原性の植物を指定植物に上げています。このように、草原や里山を国立公園や国定公園としているところは、管理形態が非常に重要になってきます。もう一つ見直されてきたのは、シバやススキが繁殖牛のエサとして非常に良いということです。実はこれら繁殖牛に好ましい野草は150種もあり、その時々気象条件などでいろんな野草を食べることができ、牛の健康維持にも良いのです。このように、軽装備で低コストな地域資源として、置き去りにされた野草類や草原が見直されているのです。

学会レベルでは、これまで草地を改良し、新しいものを入れることがいいことだという風習があったのですが、むしろ私たちの身の回りの草資源をもう一度見直そうではないか、という形で研究が進んでいるようです。

みなさんご存知のように、日本は年間3000ミリの雨が降って、ほっておくとすぐ森林になってしまいますし、草もすぐに生えてきます。このような草資源大国の日本で、もう一度見直そうという動きが畜産分野で出てきています。

最近の環境庁の調べでは、都市住民の意識も変わってきており、阿蘇を訪れる目的が火口見物だけではなく、むしろ草原目当てであり、草原の維持管理に積極的に参加したりしています。また、草原を訪れる人はまた別の草原に行きたいとも感じています。

いよいよ最後の項目ですが、人畜一体総力戦で草原の再生を、ということなんです。三瓶山ではもう4年になる「モーモー輪地」ですね、防火帯を作ってその中に慣れたおとなしい牛を放し、草を食べてもらうわけ。このヒントになったのが阿蘇なんです。175も牧野組合のある阿蘇なら身の回りにいろんなヒントになるものがあると思うんです。モーモー輪地はかなり広まってきています。かなりノウハウも蓄積されてきたと思います。モーモー輪地でわかったことは、人が管理しづらい所は牛を利用するという事です。防火帯を作ってその中で牛がなんでも食べてくれます

し、足元の悪い場所や人が入れないところにも入って草を食べてくれるのです。

それから、草を利用しようという動きも高まっています。牛のえさになりますし、わざわざ野草を買う酪農家もいるのです。化学肥料を使わず、牛のストレスを取って、そんな牛の牛乳を飲んで、お肉を食べる。非常に安全な食品を提供できるわけです。そして、これらをわかる人に提供していくわけです。

BSEの問題で学校給食も牛肉を使わないようになりましたが、放牧牛の安全性を具体的に伝えることによって、使ってもらえるようになっていきます。健康的で安全な食材であると認められえているわけで、このようにきちんと情報を発信し、マーケティングを行っていくことが重要です。最近では、オーガニック畜産という動きも出てきています。

実は、阿蘇の草原を畜産だけで考えてきた歴史は30年くらいなんです。阿蘇の草原の1000年の歴史は農業によって成り立っていたんです。このような循環システムを現代風に再現していく必要があると思います。農業のトップ経営をしているところは、実はススキなどの野草を堆肥にしているんですね。これは牛の飼料というだけでなく、園芸農家や野菜農家が使っているんです。野草の堆肥を使うことで、減農薬の野菜を作ることができるのです。

このような草資源はバイオマス資源として利用する考え方がヨーロッパに広まっています。草であれば無駄なく利用できるのではないかとということです。木材バイオマスに変わるエネルギーとしても注目されているのです。

最後の話として、都市住民の参加ですね。ボランティアの参加が非常に求められています。さらには、都市住民などが国立公園の管理ができるような仕組みが確立されようとしています。都市住民が参加しやすい形態になりつつあります。

このように、草原にはいろんな要素が含まれています。ツーリズム的な要素もありますし、雇用も増やすことができます。畜産を中心とする地域振興を考えてほしいと思います。

最後に、私が言うまでもなく阿蘇は日本一の草原地帯です。阿蘇が中心となって循環システムや新しいノウハウを蓄積し、発信していくことで、全国の草原が守られていくと思いますので、宜しく願います。

各地の報告

第2回草原シンポジウム
サミットが三瓶にもたらしたもの

発言者／高橋 泰子

(鳥根県大田市 緑と水の連絡会議)

都市住民のボランティア活動を継続して
いくことで草原を再生していきたい

私は鳥根県大田市からやって参りました、環境NGO緑と水の連絡会議の代表をしております高橋と申します。縁がありまして、平成9年度に第2回の草原シンポジウム・サミットの実行委員長をさせて頂きました。会の折には、三瓶宣言として草原のあり方というものを、いわばビジョンの形で出させて頂いたわけです。それが数年経った今、理想に現実がいかにつづいていったかと、そういうことをこの会でご報告させていただきたいと思えます。会の活動というものみなさんのお手元にありますレジュメの方に書いてあります。特に太字部分は第2回のシンポジウム・サミットの後に行なわれた会の活動ですのでご覧いただければと思います。

そもそも阿蘇や久住のように大きな草原ではなく、そして全国的にも有名でもない三瓶山において、第2回という早期の全国的な草原シンポジウム・サミットが行なわれたのは何故かということ、それからお話ししなければならないかもしれません。

三瓶山というのは、江戸時代から和牛放牧が盛んな所でした。1950年代には約900ha（ヘクタール）の入会放牧地に数千頭もの牛を放牧しておりました。その草原景観が美しいということで、1963年に国立公園に指定された訳なんです。しかし、全国どこでも同じ状況で、1960年代になりますと、放牧が撤退いたしております。その撤退の結果、西の原の森林化、そして草原にいる動植物の減少ということが起こってまいりました。

三瓶には西の原、北の原、東の原という三つの名前が残っているのですが、これは西の原の昭和30年代頃の写真です。山のとっぺんまで草原が広がり、

牛がかきまぜることで不透水層ができ、それを牛達が水飲み場としている「チトウ」があります。そして懐かしいボンネット型のバスが走っており、当時は牧歌的風景を残しているところです。



西の原は植林されたこともありまして、今では山にはうっそうとした木が生えています。東の原という約50haのスキー場があるところなんです。ここでは一軒の農家が絶え間なく放牧を続けておりました。その結果、国立公園指定の要件を満たしている状況がここだけは保たれていたわけなんです。折りしも、牛肉輸入自由化の時期と重なる時がありましたよね。そして畜産振興、草原景観復活とそういう二本柱をたてまして、大田市が西の原に放牧を再開したわけなんです。これが、たしか平成8年でした。この歴史的事実遭遇した私たちはそれからの活動を『農家の生業を通じた二次植生の保全』ということにテーマを変えていったわけなんです。そして、この状況を全国の皆さんに報告しなければならないという気持ちが生じまして、第2回草原シンポジウム・サミットを開催したというわけです。

やっとの思いで草原シンポジウムが終わった次の年、「大田市が野焼きを止める」と言い出しました。「何言ってるんだ」と私は非常に怒りました。「全国に対して草原維持はとっても大切なんです。野焼きの重要性を発信したばかりじゃないか」。よくよく聞いてみると野焼きの前の、森林に火が入らないよう防火帯を作る、それを森林組合に委託する、その委託費用が出ない、こういうわけなんです。さて困った。これはどうしたらいいだろうか。そういえば、阿蘇の方でもこういうような事例があったかもしれない。そういうのをヒントにいたしました。その時に電気牧柵とそれから牛をつかって耕作放棄地を管理しているというケースに出会いました。これが『モーモー輪地切り』の始まりなんです。これは草原サミット・シンポジウムというつながりがなかったら、思いつかなかった。そういう風に思います。

牛は本当に私たちの期待に応えてくれて、草を食べつくしてくれました。牛が歩きやすいようにと、広くとった輪地は野焼きの消火作業には非常に効果的でした。強風が吹いても、野焼きができるかと歓迎されました。また、第2回の草原サミットの時にですね、この労働に対して牛に賃金を払う、羊に賃金を払うという事例を聞きました。これをヒントにわずかではありますが、私たちはこの牛たちに感謝を込めて賃金を払うことに決めました。しかし、これでいいのだろうかという疑問も一方ではあったわけですね。本当は賃金として代価を払うのではなくて、地元の人たちがこの肉を食べて、この循環を継続していく、そちらの方がこそ大切なのではないだろうかとは思うようになったわけなんです。

実は、大田市三瓶山の野焼きというのは、平成元年に大火事があり、その反省から、大田市が復活をさせたんですね。しかし私たちは、行政とか、農家の人たちだけが、草原維持に関わるのだけではなくて、都市住民、そういった人たちの方とか知恵をかりて、新しいコモンズを作っていくべきではないかという風に言い続けておりました。そのためにいろいろなアイデア、胸元にあるゼッケンを作ったり、それから腕章を作ったり、そういった形でボランティアとして参加することにしていました。

このように、活動を継続していくことで草原が再生されていくのだと今は実感しております。



各地の報告

復活した安家森かぬか平の
林間放牧

～短角牛によるふるさとの森の景観保全への取り組み～

発言者／嘉村 明美

〈岩手県岩泉町 安家地区活性化推進協議会自然部会〉

短角牛による林間放牧、そして都市住民の
サポーター制度が草原を守る

安家森では、明治時代から日本短角種の牛による林間放牧が盛んに行なわれていた歴史があります。ブナやタケカンバの原生林と「かぬか」と呼ばれるノシバの美しい景観があります。

しかし、畜産振興のためということで草地造成が行なわれ、生活や社会情勢の変化から平成4年に放牧を止めてしまい、それからノシバは姿を変え始めました。

このままではいけないということで、平成7年に活動を始め、まず私たちの生活から変えていこうということで、活性化策を講じ直売所などを作りました。

そして、平成11年にノシバの生育にふさわしい環境整備と、生態系を保全するための検討を始め、平成13年からかつての短角牛による林間放牧を復活させることにしました。

そのために、林間放牧サポーター制度というものを作り、賛同者を募りました。ここに人材がいっぱいいました。これにより、2年を経過しましたが、ノシバも見違えるように回復しつつあります。

※サポーター制度の概要

「安家森の景観保全の林間放牧」の趣旨に賛同する人をサポーターとして募集し、会費をもって活動の維持管理費に充てている。

1. 会費の額 年額8,000円とし、3年間は継続する要件を満たす人
2. 定例行事や安家へご祭りへの案内、会費の中から短角牛肉などの特産品を宅配
3. 会報の発行「べごまぶりっど通信」年3～4回程度
4. 成果 畜産農家、関係機関、サポーター会員の協力をいただき2年を経過したが、ノシバも見違えるように回復しつつある。サポーター会員現在111人。「通信」で情報発信、5号まで発行。

●第1分科会

テーマ

「草原の活用活性化への新たな取りくみ」

発言者：園田 盡（木落牧野組合長）

山本嘉人（九州沖縄農業研究センター草地管理利用研究室）

私は、九州沖縄農業研究センターにおりまして、草地管理利用研究室の山本と申します。生まれは、隣の県の福岡県八女郡黒木町というところで、阿蘇からは車で一時半ぐらいでいけるような所です。小さい頃はよくこの辺りに家族で来たり、或いは修学旅行みたいな社会科見学でしょうか、今思えばよく来ておりました。やはり当時から広大な草原がありまして非常にいい所だなと思っていたことを覚えています。それから就職して栃木県にしばらくいたんですが、6年前に九州沖縄農研に転勤してまいりまして、ここ数年阿蘇のことについて学ばせていただいています。今日は若輩者ですが園田組合長と一緒に司会をさせていただきます。園田組合長はベテランですので私は安心しております。では、自己紹介をお願い致します。

初めまして、皆さんこんにちは。園田盡と申します。木落牧野組合長をやっております。なかなかこういうかしこまった席は不慣れなので山本さんに助けをもらいながら進めたいと思います。どうかよろしく申し上げます。



（山本）

第1分科会のテーマは、「草原の活用活性化への新しい取りくみ」というタイトルにしております。みなさんご存じのように、草原の活性化をはかるべく阿蘇地域では様々な新しい取りくみがなされております。輪地切りのこともそうですが、放牧の振興をはかるために、周年放牧、預託放牧、水田放牧等



といった新たな取りくみがみられております。やはり、草原の活性化に向けて、基本的にはやっぱり利用を高めるしかない。すなわち、放牧する面積を広げて頂くしかないと思います。

預託放牧では、放牧する郡内の牛が足りないんだからよそからもってくることです。たとえば熊本県が取り纏んでおられる広域の事業があります。これは、今まで阿蘇郡の牧野組合には組合以外の牛は入れていなかったんですけども、郡外の他の牧場の牛をお預かりしてその分ここで放牧してあげましょうということ。確かに一頭あたり一日200円か250円ぐらいだったと思いますが、それぐらいお金を頂けるわけですから、その意味では放牧が広がっていくと思います。

次は、周年放牧です。これは阿蘇郡内の牛を有効活用するという事ですね。今までは夏しか放牧しなかったんですけども冬も放牧する、ということになれば、それだけ牛が草地を利用する期間が長くなるわけですね。今までは半年しか利用しなかったけれども、同じ頭数でも一年間通して利用すれば結局

は今まで以上に草原が維持できる面積が広がるということになります。

水田放牧は草原の活性化に直接関係ないように思われますが、水田に放牧するという事は、田に放牧する夏場だけではなく冬も近場で飼うということです。ということは、一年を通してその牛は畜舎で飼わなくてもいい。畜舎で飼わなくていいということは、畜舎の大きさに影響されずに、飼育頭数を増やすことが可能なおけです。農家が飼える牛の数が増えればそれだけ放牧して飼って頂ける頭数が増えるわけですから、草原の利用が広がると考えています。

最後に草地酪農です。酪農は基本的に乳量を上げるために緻密な管理による舎飼いが多いいんですが、手間がかからない放牧にして、一頭あたりの搾乳量をそんなに要求しない。一頭あたりの乳量は多くなくていいから安全なミルクを生産しよう、ということです。草地を活用したミルク絞りができれば、草地で作った安全なミルクということで付加価値を高めることができると考えてます。

(園田)

説明はあまり上手ではありませんが、モーモー輪地切りについて説明させていただきます。だいたい今から30年前頃は放牧牛530頭、放牧馬50頭くらいいました。放牧場は芝化しました。その頃は芝をはいで販売したこともありました。八十八夜(5月2日)からその年の11月30日までと放牧期間を決めて、全頭下牧していました。牛肉の自由化により牛が値下がりがりして、3分の1に減ってしまいました。そのため放牧場は人間が前進できない程に草丈が伸び、その上に杉林が増えまして、野焼きが非常に困難化になりました。少子化と高齢化も重なり困ってしまいました。

その時、大滝先生がモーモー輪地切りをしようと思うが力を貸してくれないか、とお話がありました。モーモー輪地切りと言っても、牛にさせるということはいわかりますが、どうやってするんだろうか、カヤの穂が出て牛が入っても先が見えないような状態でした。全国の方々から説がありました。最初、電気牧柵器を500メートル張って、14

〜5頭くらい入れたわけです。しかし、最初は牛を入れてくれないかと言っても、誰も入れてくれなかったわけですが、私の瘦せ牛を10頭と、あと2〜3頭募集しましてなんとか形ができました。初めてで日数が足りなかったのでだいぶん草が残りましたが、それでも野焼きがいつもの野焼きよりか楽にできました。平成13年度は本腰を入れて取り組もうということで、管轄の方々と正式に相談させていただき、幅30メートル、長さ2,000メートルに牛を30頭に増やして入牧しました。最初は少し不安でございましたが、一般牧野にいる牛とモーモー輪地切りの中にある牛の健康状態でございますが、何らかわることなく、かえって一般牧野牛よりモーモー輪地切りの中の牛の方が健康的に優れていたような気がしました。最初はいくつかの不安があったんですが、一つは水をどうしようかということです。結果的には簡単にできました。端の方に鉱塩を置き、中心に水槽を置きました。結果的には立派にでき、野焼きの時は安心してできました。モーモー輪地切りの中を焼くのは苦勞しました。今年の野焼きの日は風速18メートルくらいの風でしたが平気で野焼きができました。14年も行ないたいと思います。

しかし、注意しなければならぬのは分娩前の牛で、電気牧柵の中で出産しますと、仔牛が電線に触れますと何らかのつぼみに巻きつくことがあります。私の仔牛も触れて死亡しました。

種付けが終わってその日を覚えていて放牧しますと良いと思います。牛の管理は非常に良いと思います。来年も行ないます。





質疑応答

Q：今年のモーモー輪地切りは、道路際だけだけど、林地との境はどうか

A：木落牧区は現実に林地との境であった。水の確保ができれば良い

Q：30m幅は、泥土にならないか。

A：問題はない。一部改良草地内にチカラシバが入り大変だったので、最初に刈り取った。

Q：木落牧区の牛の状態はどうだったか

A：大変良かった。しかし、草の状態を見て、牛の頭数を調整したが良い。

Q：放牧を少し早めに入れたほうが良いのだろうか

A：2年目からは、ススキがだんだん小さくなるので、遅く放牧しても良い、管理がしやすくなる。

Q：ラジコン式の輪地切り機械の購入、購入資金の手当てをしてもらいたい

A：行政等で検討頂きたい。ただ機械では刈り取った後、輪地切り焼きが必要となるが、モーモー輪地では牛が食べてくれる。

Q：モーモー輪地切りの経費の比較はないのか

A：環境省から報告、評価をもって、コスト計算をしている。ボランティア等と勘案しテストでの結果は、1m当たり330円、

A：阿蘇でなければ、30万円/ha初期投資、減価償却を考えると1年目5万円/ha、2年目3万円/haとなる。電柵でよいが、支柱を鉄柱にすると撤去の手間がかからない。

Q：電牧の経費と人力による輪地切り作業の経費の比較はないのか

A：遜ぶのが大変で、張るのは簡単である。輪地切りは大変。電牧は設置に1m当たり79円
撤去に1m当たり16円



Q：電牧張りはある程度計算できるが、急傾斜が問題である。その場所でのヤギはどうか

A：急傾斜地では牛なら輪地切りの幅を広く取ると良い。平均傾斜31度以上の草地にヤギを入れた場合、移動できるが牛より電柵が大変で4段となる。(牛は3段) また、冬季の飼養や利用の問題がある。

Q：草原を活かした牛の肥育はできないか。牛を牛肉までの仕上げまで地元でできないか。放牧肥育といった現実があるのでそれが大事ではないか。

A：市場の受け入れ体勢が整ってないし、肉質が心配。専業の畜産家が少ないから難しい、分業化している。なぜ阿蘇に広がらなかったのか。畜産農家だけでは完結しない。

Q：今が草原を生かすチャンスではないか

A：有畜農家と無家畜農家で意見が違い輪地切りや野焼きが難しくなっているのが現実である

A：昔は草地の利用度が大変高かったのに、輪地切りは必要なかった

Q：草原の利用度について、林地にして再利用計画といった研究が必要ではないか

A：林地と農地にはかなりの溝がある。林地農地の共存は難しい行政の壁がある。

A：最終的土地利用は垣根をとり実践していくことが必要。(山田東部で実践中)

Q：山口県秋吉台は牛の放牧はできなかったが、放牧が検討されている。

A：環境省としては、土地利用の取りくみが必要

A：機械の導入は、コスト高1300万円することから、機械を他にも利用することが必要である。

Q：野焼きの際、参加された方に肉の消費として、食べてもらうことはできないか

A：ボランティアに対して、焼肉大会をするようにしている（木落牧野組合）

Q：畜産農家が減って放牧が少なくなり草原が守れなくなったのではないかと。畜産農家の馬屋に牛、馬が増

える方法、畜産農家が増える方法はないか。

A：今畜産をやれば儲かる。補給金が入ってくる。

Q：非農家でも権利を持っている。入会権に問題があるのではないかと。

A：入会権と共に各種慣例が問題である。

A：草地の利用、有機畜産に付加価値を付け、誇りを持ってよいのではないかと。



●第2分科会

テーマ

「このままじゃ牛もおらん 人もおらん！」

発言者：徳野貞雄（熊本大学文学部教授）
井 信行（元上田尻牧野組合長・畜産経営農家）
若井康彦（地域計画研究所）

豊かな食文化をアピールし、 阿蘇の牛を食べてもらうことで生き残れる

第2分科会は過激なテーマで「このままじゃ牛もおらん、人もおらん」というテーマですが、まず人の問題からやってみよう。

一番基本的な問題は、リアルな話からやってみます。狂牛病問題で何が足りなかったのか？消費者への対応を造ってこなかった、もうひとつは阿蘇全体の地域の担い手をどういう風にして確保していくのか。阿蘇は農業以外にどのように何を活用すればよいのか？阿蘇の人達は7割5分農業以外の仕事をしている。だから、輪地切りが難しい。人の問題をきちっとしないと、野焼きが出来ない。この3点について、自己紹介を兼ねてお話していただきます。

(井)

井信行と申します。牛を30頭飼っております。生産から牛肉の販売までやっております。水田は30Haですが、無農薬米を宅配で販売し、無農薬の米でお酒や焼酎も作っております。さらに農業とは別に池山水源でレストランをやっており、現在レストラン2カ所と売店と、牛肉の加工所を12名でやっております。ほろの小屋を改修して、都



(井)

市と農村とのふれあいの家を上日曜日にやっています。そこは都市の方々がやってきますし、小学生の体験の場になっております。

周年放牧で、さわやかビーフというブランドで、健康な牛づくり、市場をしっかり作ってきた。

(若井)

若井康彦です。私は今日は木楽館の江藤館長のピンチヒッターとしてやってきました。以前阿蘇地域振興デザインセンターの事務局長をさせていただきました。井さんたちと色々実験したり、井さんをはじめとする皆さんと汗を流して地域づくりをしてきました。そういう観点から、草原について語りたいと思います。阿蘇に来たとき、とにかく旨いものを食いたかったです。が意外に農村には食がない。食材はあるのだけれど食べる場、情報がないという意味です。草原と言え、赤牛だけれども、赤牛を食べるにも、どこで食べられるのか分からない。肉があったとしても、これが本当に阿蘇を食っていた牛かどうか分からない。日本人は肉の食べ方はヘビー。おいしい牛肉が食べたいという切り口から畜産を考える。それも、地域づくりの一環だ。そういうことで、井さんたちと活動してきた。素材・場所・仲間をつくることは地域づくりなのです。

(徳野)

熊本の徳野です。熊さんとも呼ばれています。早速ですが、田んぼ一反で10人たべられる。牛一頭で



700kg。ステーキで1000人分。内臓などを舍めれば3000人の食料になる。しかし牛一頭で経済的にどれだけの人が食べられるかというのは、難しい。

BSE問題のとき、JAの宣言文を聞いていて思ったことがある。どういう対応をするのかなと思ったら、今度の問題は悪かったのは国なんだ。それじゃどうするんですかと聞けば、検査態勢をしっかりとす。消費者についてどうするのかという話がなかった。農村には食が無いという爆弾発言がありました。僕も爆弾発言をしたい。消費者の処に行かないと、問題がある。

何で狂牛病が発生したか理由は、話はしなくていい。狂牛病の権威は、帯広畜産大学だからいい。行政対応が悪かったというのは、東京でやればいい。狂牛病も発生していないのに、どうして福岡の消費者は牛を食べないのか？牛肉が暴落しているのに、肉うどんの値段が下がっていない。ちょっと腹が立つ。狂牛病でもないのに、どうして消費者が食べないのか？畜産農家は、消費者に牛を食べて貰わないといけない。狂牛病が起こってから、牛が売れている畜産農家がある。毎日新聞を開いたら、井さんのところで4割増で牛が売れているという。山形県の有機畜産や消費者団体に注目が集まった。私の知っている矢部町の坂元農園、鳥取県の奥牧場は売れている。消費者とずっと交流している肉は売れている。

農業者というのは作るのほうまいけど、売るのは下手。世の中は嘘ばかり。だから顔と顔の見える販売が大事。特に山村農業、付加価値の高い農業を作っていないといけない。

(若井)

若井です。都会の人は食について、みんな疑心暗

鬼になっている。農村は今までちゃんとどこに何があるかを知らせてきたか？知らせてきてない。ですから、私たちのやってきたことは農村では非常識だけど、次第に常識になる。私の今住む町から狂牛病が出た。技師が調べてみたら陽性だった。そのことが世に出たら大騒ぎになる。でも技師ががんばった。ひとりの市民として、その良心にかけて。だから、千葉でそれが明らかになった。

(徳野)

消費者をばかかしすぎた。消費者のそういう行動が起こるようになっていた。食べ物というのは、人に良いと書く。そういうカクチに農産物を商社が変えていった。農家は330万人いる。消費者は、全然分類されていない。消費者にも、ろくでもないやつはいる。そういう消費者を排除していないから、生産者が困る。もうそろそろ消費者を分類して差別してもいいのじゃないか。消費者の分類をして、生産現場と交流している人は、肉を食べているだろう。消費者というのは、絶対安全な物ばかり食べてはいない。ふぐは食べるだろう。ふぐは死ぬ。年間16人死ぬ。でも食い続ける。でも食文化だから、食べる。

人間同士の地産地消を作る必要がある。売り先変更だったら無理だ。

(井)

私は生産者ですから、先生は消費者だったので消費者の悪口を言っていた。消費者は安全なものといながら、安いものに向いていく。コンビニの売り上げに伸びていく。生産者と消費者というカクチなら、安全なものを望んでいる人達と組んでいく。私たちは、牛で儲けようとは思わない。投入した労働分を戴く。お店では、30%引きで買っていく。そういいながら、恐ろしいか



ら食べなくなるけど、だから適正な価格で買うかという、そうではない。牛を飼って飯が食えれば、村から町へ出ていかななくていい。適正な価格で消費者に買っていただきたい。

適正な価格よりも、産地間競争に勝つと言うことが大事だった。消費者ニーズという、いろんな人がいるので大変だ。農業は、自然の摂理に従うべきだというのが85%。いつでも食べれる様になって便利になった。でも季節感が無くなった。行政も農協もあけて、消費者の教育をシステム化してやるべきだ。

(徳野)

食全体で見えていかないとダメ。ちょっと経済にこだわります。昭和30年代は、食べ物に使っていたお金は7兆円。農家に帰ってきてるのは4兆円。今は80兆円で農家に帰ってきたのは17%だけ。後は加工食品にいつている。生産加工流通まで農家が入ってもいいだろう。チーズを作り、アイスクリームを作っている。農家は儲からないけれども、加工食品は儲かる。九州大学の農学部を卒業した学生たちは、誰も農家には行かない。みんな加工食品へ行く。

肉の加工所は、自分たちが売らないとダメと言うこと。たまたま村が作った加工所があったから、私が仲間づくりをした。今まで、霜降り指向で動いている肉業界の中で、コストや餌の面を考えた場合、



何でもかんでも食べさせる。そして霜降りの肉を作る。私たちは、牛は反芻動物ですので、草で大きくなる。草だけで600kgになる。粗飼料を食べてない臓のしっかりした牛を作る。BSE問題から、急に脚光を浴びた。井さんのことは新聞に載っていたからと言うことで、多くの人がやってきた。まじめに農家をやって、まじめな方とおつきあひする。阿蘇は感張っていい。そういうところにいる。どうしてここで牛飼いを辞めていくのかと思う。それは、売り方が下手なんだ。牛本来の姿をこわさない。そういうカタチで、みんなアピールしながら売れば、阿蘇の牛は生き残る。

(若井)

赤牛の話に戻しますが、やっているとおもしろい。肉を食べている人達は、限られた方法でしか食べてない。でも、あるシェフの話を知ると、牛の全部が宝の山になる。胃袋や腸はうんと安い。きっちり食べれば、赤牛一頭の出産は上がる。数十%は上のせになる。だが、そういう肉の部位ってどこで手にはいるのか？どこにどの食材があるか分からない。そこまで分かる農村にならなければならない。どんないい食材があっても、どうやって食べるかまでを作らないとダメ。食文化をしっかりと作る。赤牛は絶対売れるが、そのためには阿蘇の人達自身が牛のガラでスープを作らないとダメ。豊かな食文化を作ることが、これからの農村の課題なのです。

阿蘇には、いい牛肉がある。さしの牛肉だったら100グラムしか食べられないところが、赤牛ならば200グラム食べられる。あるシェフ氏が言った。霜降りの肉はいりません。毎日食べたら、病気になりますよ。ただ赤肉でもワインをたっぷり使ったら料理の値段は同じ。このワイン肉料理は、確実に二人の人が働いている。農村の中にいろんな技能を持った人達が生きていける仕組みを作らないといけない。ヨーロッパの農村は、楽しいところだから、みんな行く。21世紀の農村は、牛を飼っているだけではない。そういう農村を作らないといけない。

(徳野)

牛は牛だけ。米は米だけ。農業は農業だけ。これは困る。これを専門家だと思っている人がいる。農水省というのは、農村に住む人のことをしない。農地をします。農水省というのは、農地農産物だけをする。阿蘇に住んでいる人は、いっぱいいろんなことをしている。農業振興だけして地域振興しようと言うのは、片翼飛行だ。飛び上がれない。合鴨水稲会を10年した。合鴨農家は何をしてきたのか。あの人は、鴨は全部くってしまったし、米は売ってしまった。農業は銭に換算したら、こんなつまらない者はない。でも楽しい。うちの親父はバカだ。あれだけ忙しいのに、結局正月まで稲刈りできなかった。だけども、そういう親父だから、後を継ごうと思った。阿蘇はおもしろい。阿蘇の就業人口21%。無職が少ない。バランスが採れている。おかしいのは、みんな熊本で働いていない。阿蘇で働いている。

(井)

レストランをどうしてやったのか。若井さんと仲良くなってから。考えるようになった。すき焼き焼き肉だけなのか？若井さんの発案では、他に安くておいしい食べ方はないのか？そういうことで、レストランで食べさせよう。そこでやる人が生き甲斐を感じる。30万も給料取った人が、どうして私のところで働くか。すねとか煮込みの肉が売れたという話をされる。仕事に生き甲斐をもたれる。私の持っている牛肉も、1頭60万とか70万になれば、やっていける。牛肉には、安い部分も多い。そういうところを、おいしく食べられて、売れば、牛の価格が上がるではないか。村の人がそういう食べ方を覚えれば、冷蔵庫に入れて食べればいいじゃないか。これからは、そういう食べ方をレストランで教えて、あそこに行けば変な茶漬けがある。都市住民が、田舎へ来る。相乗効果がある。生き甲斐を感じて、働く若者が増える。かなりの村に、人が暮らせる部分が増える。販売から食べさせるまでということを始めた。



鳥取県の奥さんに提案したことがある。ケーキを焼くのがうまい。集落の人が、陶芸していたり、木工していたりする。お誕生会みたいなシステムが出来ないだろうか？そういう農村文化を出して貰いたい。人口は減らざるを得ない。農村部も都市部も人口は減る。世帯員が小さくなる。僕は大金持ちのはず。僕は20万円の住宅費を払っている。ただし、私の住んでいる部屋は1DK。鍋を食べてない年寄りが増えている。一人暮らしだから寂しくて食べれない。こういう問題が増えている。そういう状態の中で、現実を見てやっ払いこう。定住人口から、交流人口論でやっ払いこう。人口8万しかないけど、1000万人の観光客が来る。阿蘇は8万しかないけど、365を掛けると2000万人になる。

(若井)

働き方と経済成長は一筋をわではいかない。私たちの学生時代、東京で札幌ラーメンがはやった。それまで町にあったしなそば屋を淘汰してしまった。しかし、チェーン店に成れば社長はラーメンを煮ることは辞めている。ところが、お客になってみて分かるのは、チェーンの数が増えると味が落ちること。農村は、ねずみ算的な高度成長が出来なかった。しかたがないから、農産物の値段を上げて釣り合いをとってきた。しかしチェーン店のようにになっても、勝てない。中国に勝てない。一人づつ頑固なラーメン屋を増やすつもりで行けばいい。千人の村にたった一人の働き口を作ることは、百万都市が

と千人の働き口を作ったのと同じ。1000人の村が1001人になることはすごいことだ。それは例えれば赤牛の肉を外に出すのではなくて、村で上手に煮込む人をひとり育てることだ。

トヨタという会社は、世界でトップ会社です。日本人が沢山車を持っているから、日本人は一人一台車を持っている。地元をきちっと見ていくのが大事。時代は変わった。40年前は、大都市は若い人が多いけど、今は年寄りが増えている。都市部で年寄りが井さんのように醒けるだろうか？農村の人は文句ばかり言う。でも、言ってる本人は生き生きしている。阿蘇の年寄りは元気でしょうか？

よそに出たら何も出来ないから、村に住んだ。村に住んだから、なるだけいいようにした方がいい。なるだけいい思いをする時間が欲しい。そうするには、なにをしなければいけないかということを考える。いやぼっかりでは、次のことは出てこない。燃える思いを持つ仲間が増えればいいと思う。

井さん達は、5年くらい前にさわやかビーフを持ってきたときは、食べさせることについては、ゼロのゼロだった。でも、いまはなんでもできる。井さんは、ここにいれば何でも出来る。そういう場所を作ることが、地域づくりだ。畜産やっている人は、悲観的だった。

井さんは、知識としてではなく、技術として身につけている。サンマのからくりテレビは年寄りをバカにしているが、ダッシュ村は年寄りを尊敬して学んでいる。1999年に調査したこと。野焼きは誰がしているのか。地付きの人がしていた。非農業職の人が一番輪地切りの焼きに参加していた。牛は、野焼きをしてくれない。男性は経済的括伝統的な理山、女性は、経済的と観光のため。阿蘇の環境を守ることは、自然を守ること。どうやって人を確保していくか。地付きの後継者をどうやって増やしていくか。



(井)

畜産農家の立場から草原を見る。今までの畜産は、抜本的な改革が必要。阿蘇の草原で1万5千頭になれば、輪地切りもいらぬ。百姓は経営の感覚に疎い。どういうカタチで肉用牛で生き残っていくか。やりたい人が、阿蘇の原野を活用する権利がある。今やまなみハイウェイを走っている人達をどうやって草原に結びつけるか。

40年前は4万ヘクタールの草原があった。草原は、ガソリン基地だった。牛の数が減るに従って、草原が減っている。技術的な側面で言うと、草原を集約する。赤牛の農家とシェフの関係。ボランティアの世界。赤牛農家とシェフがいれば、お客さんがいる。野焼きを手伝ったら、地域通貨が貰える。日本の経済の2/3である。みんなが車を買わないから困っている。

農の多面的なやりかたを都市の子供達は、私たちが何とも思っていないことに感動している。むしろいやがっている。私たちは、すごいところに住んでいるんだ。

うさぎおいは、うさぎを飼るのが大事ではなくて、うさぎ追いに参加する人がお金を持ってきてくれるのが大事。

都市と農村は分けられない。消費者と生産者は分けられない。消費者が生産者を守らないとやっつけない。



まとめ

〈1〉牛をいかにして売るか

牛肉の供給地にとどまらず、牛の食文化の発信地になる必要がある。

生産者は、消費者を選ぶ必要がある。

消費者においしい食べ方を教育する必要がある。

どこにどういう食材があるかを情報発信しなければいけない。

消費者には、適正な価格で買っていただきたい。

生産者は作るまで終わっていて、売ることを考えてこなかった。

これからはしっかり販売までしないとダメ。

21世紀の農村は、生産から加工販売までやるべきである。

牛は、瞬から瞬まで食べれば、結果的に高く売れる。農村には食材はあるけれども食文化がない。

〈2〉担い手をいかに育成するか

農作物を中心とした総合的な生活文化産業の形成をめざす。

赤牛生産者とその肉をおいしく食べさせるシェフの関係が必要不可欠。

チェーン店のラーメン屋ではなく、牛を良くなっていく頑固親父のラーメン屋を増やすように、農家を増やすことが大事。

〈3〉畜産だけでは草原の維持は不可能

一人一人の働き場所を作ることが重要

野焼きを担うのは、畜産振興だけではダメ。

消費者と交流することが生産者を支える。

農村を選べた見方をするのはやめよう。農村にいれば、命寄りでもできることはある。

うさぎ追いの様に、地域環境を活かして活用する工夫がキーである。

分散している草原の集約が必要だ。

牛を中心とした地域社会の確立の中で、草原の維持作業に関わる人を増やす。

地域通貨などにより、都市のボランティアの組織化を図る。

●第3分科会

テーマ

「パートナーシップによる草原の維持」

発言者：山内康二（財団法人阿蘇グリーンストック専務理事）
中川利美（熊本県畜産農業協同組合副組合長・理事）

阿蘇の草原をめぐる現状をビデオで説明し、その後
にディスカッションに入りました。

（山内）

パートナーシップによる草原の維持についての目
的や問題点について少し説明させていただきます。
阿蘇の草原の現状は言うまでもなく、日本で一番広
い面積を持つ草原であり、また九州の6つの一級河
川の源流となっており九州の水がめといった存在で
す。阿蘇の草原の特長は、牧野組合が管理している
ところです。平成10年の調査で、牧野組合員は平均
年齢54歳となっており、高齢化してきています。ま
た、ここ10年くらいでシンポジウムや講演、熊本日
日新聞でのキャンペーンなどの啓発活動が活発にな
っています。

ここ2年くらい環境省の方で、国立公園内草原計画
維持モデル事業ということではいろんな取り組みが行
われています。その中で、地元の牧野組合と都市部
の住民とにアンケート調査をしました。この都市住
民のアンケート結果を見ますと、阿蘇の草原に対
しての興味が高いことがわかります。草原の現状を知
っている人が熊本県内では70%もいます。

国立公園というのは国とか自治体が管理している
ものだと思いますが、実際は地元の農家の方
たちが維持管理しているというのが現状で、そうい
ったことがすこしずつ伝えられるようになったのかな
と思います。草原を今のまま残すべきだという人が
86.3%、草原問題のための参加協力に対しては、非常

に関心がある、関心が
あると答えた方が79%も
あります。さらには地
元産品の購入や協力金
等の支払いにも60%の人
が前向きに考えていま
す。

これに対して、地元
の牧野組合の人はどう
考えているかといいま
すと、草原を残すべき
だと思う人が70%近くい
ます。観光客の方が草
原に立ち入ることにつ
いては、一定のルール
を見つけなければならず、
一番懸念されるのが日
然環境への悪影響であるといえます。

パートナーシップで言いますと、都市と農村と行政
のパートナーシップがあります。また農業者同士の
パートナーシップ。これは畜産農家だけでなく、園
芸農家や畑作農家も含めた農業者の連携パートナ
ーシップが必要であり、これらの課題も非常に重要だ
と思われれます。それともうひとつは、ここ熊本の場合
は草地を持たない平坦部の畜産農家の牛を預かって、
阿蘇の草原で育てるといった放牧の取り組みが行
われています。このような広い地域での連携パート
ナーシップも起こってきているわけです。



このように、草原維持をどのような形で連携パートナーシップによって行っていくかということが非常に重要ではないかと思われまます。ちなみに、もうひとつご紹介しますと、我々財団が行った調査によると、平成7年から平成10年の約3年間の間に、阿蘇郡の有畜農家の減少率は26.3%という凄まじい減少になっています。175ある阿蘇郡の牧野組合の総合診断を見ると、野焼きをできないとか一部だけ中止している牧野、つまり草原の維持が困難になっている牧野が全体の20%に相当する35の牧野でそういう状況が生まれてきているという結果が出ています。さらに、現在は維持されているけど、平均年齢が60歳を超えているなどといった、継続が難しくなっている牧野が40牧野で、全体の22.9%に相当するといった結果も出ています。

こういう現実を踏まえて、どのように連携パートナーシップを行っていくかということはこの分科会で考えていきたいと思えます。

(中川)

山内さんの話の中でありました。畜産農家同士のパートナーシップについて、熊本県内11の農協があったわけですが、そのうちの8つが合併しました。阿蘇の草原を維持するためには約1万頭の牛が必要だろうと、しかし牛は減ってきていて、なおかつ均等ではなくある地区だけが減って、利用する面積には牛が足りない状況で、それを解決するためにいろいろと調査研究をして、今では阿蘇以外の畜産農家から牛を預かって、阿蘇の草原に牛を入れている状況



です。このやり方は農水省も日本型として全国でもやっていきたいと、お墨付きをいただいたような状況です。

(山内)

では、これらの事例も踏まえまして、ほかの地域の事例・提案をおねがいします。



(以下、参加者の発言)

福岡から野焼きに参加している。都市と阿蘇のパートナーシップにおいて福岡とのつながりも深いので、福岡版の新聞等にも広報を行ったほうがよい。福岡の人に関心がある。

水系を考えたら、福岡も考えた方がよい。(筑後川) 福岡・佐賀とのパートナーシップも必要である。

山口県秋吉台の草原維持も困難になっている。行政が人を斡旋するのが怠っている。

草原が抱えている豊かさ、景観、文化を守る。

久木野村の場合は山の中に草原がある。野焼きは村民全員参加。自分たちの山が牧野の上にあるので自分たちの山を守る。グリーンストックの野焼き研修は1日で終わらないので行きたくても行けない。後ろからついていく野焼き同行隊を考えている。

秋吉台の場合も共有林を守るための防火帯のため行

っている。担当集落の人たちで行う。一部の人たちの負担。パートナーシップを取り入れたい都市住民。反対者を納得させるためにどういうふうにしたか聞きたい。

阿蘇の野焼き支援に参加して危険さ大変さに驚いた。衝撃を受けた。きつさもあるが爽快感もある。助けるといふより楽しんでいる。そのことを都会の人は知らない。若い人におもしろさ、楽しさを教えるのが早い。楽しむ場所を貸してやるという発想で、助けてもらうという意識は捨てる。

受け入れが心配である。火の付け方、燃え方などいろいろある。達成感を共有できることが大事である。

阿蘇の野焼き募集できて安全教育を受けてきた。阿蘇が心のふるさととなっている。阿蘇に来るのが楽しみである。又、世界のいろいろな人と、ワークショップなどができてすばらしい。

ボランティアの方が熱心であるので、受け入れ牧野が増えてきた。要請が広がってきている。研修を受けなければ参加は出来ない。その上を目指す人にはリーダー研修も受けてもらう。

1戸の組合が現在は8戸であり、ボランティアを受け入れている。当初は心配であったが、維持が無理なので受け入れた。地元の人より一生懸命で助かっている。2年目から輪地切りもお願いしている。ボランティアのおかげで助かっている。交流施設を建設し交流を図りたい。

丸山（長陽村）の3分の2が野焼きができていない。景観・観光の維持にも目を向けていただきたい。

おれいが満足感を味わうことが大切である。充実感、達成感がある。都市側だけでも地元側だけでもできない、中間団体（第三者）が必要である。労力、経

済支援、産直など連携してパートナーシップを図る。深く考えないで遊びに来ている人にどう訴えていくのか。

300名以上のボランティアがいるが高齢化しているので若い人のボランティアの確保が課題である。

竹林の手入れを、若者にしてもらう。強制力を働かせると参加しない。役割を理解してもらう。川コマ、インターネットで集う。

義務感や労力提供だけではなく、楽しさを味わってもらおう。

若い人が入るためには、おしゃれグッズなどを取り入れる。わかもん、よそもん、のほせもんの連携。大学などに広くPRする必要がある。

消費者・ボランティア・畜産農家が元気でないといけない。畜産農家の経済的メリットが重要である。

提案・提言

- 人と自然と牛のパートナーシップ
- 産直運動
- 野焼きボランティア
- 赤牛のオーナー制度
- 草原トラスト会員制度導入
- 草地酪農の復活
- 草資源の多面的利用
- 募金運動
- サミット宣言

●第4分科会

テーマ

「考えよう！草原の様々な機能と利用」

発言者：松崎誠司郎（環境省自然保護局九州自然保護事務所長）
小笠原徹朗（阿蘇町観光協会会長）



(松崎)

環境省がこのようなことに関わっている中での中間報告として、環境省としては自然保護という観点から草原事業の予算を使って行ってきました。その中のいくつかの実証実験で、本来私どもとは縁のない牧野組合の方たちなどと一緒にみんな実験を試みており、モーター踏地切りや野焼きなどの実験を行ってきました。

その中でのアンケート結果によると、都市住民は雄大な阿蘇に魅力を感じています。また、牧野組合の方たちも都市住民を受け入れてもいいかなあと考えているようで、条件付でなら草原に入れてもいいよと思っているようです。この条件は一定のルールを作るということで、このように阿蘇の雄大な自然を活かしたトレッキングやグリーンツーリズムも行っていけるんじゃないかと思います。

阿蘇の草原は1000年の歴史があると言われていますが、阿蘇の草原を守る地元の方たちと野焼きボランティアなどで訪れる都市住民とが、自然保護の観点から協力していければ、新しい価値観の中でこれからの1000年というのも考えられるのではないかと思います。

(小笠原)

私の立場としては阿蘇の草原を経済的に活用するということがあるわけですが、阿蘇の草原が1000年の歴史があるということですが、阿蘇の草原は人間の手でできたものであり、それは文化と言っていい



し歴史があるわけです。つまり、自然にできたものではなくて、人間のなした自然景観なわけです。ところが、そのようなすばらしい自然景観を所有している人々にとって、そこでの経済価値が非常に薄れてきてしまったということが問題なわけです。

阿蘇の草原は水も供給しているのですが、都市に流れる水もここで作られています。先ほども言ったように阿蘇のこの雄大な自然でもって、ここに住む人々は生活しているわけで、ここで経済活動が生まれなければなりません。そこで、都市に住む方々にもひとつ協力していただいて、例えば阿蘇の牛を会員制で飼っていただき、その牛を草原で育てることで、おいしい水が飲め、おいしい牛肉が食べられ、自然景観も守られます。そんなこともできるのではないかなと思います。

(松崎)

水の話がありましたが、森林というのは確かに保水力はあるんですが、水を下流まで流すということ

で言うと草原の方が非常にいいわけで、熊本市などは阿蘇から流れる水を使っているという意味では、非常に恩恵を受けているわけです。そのため、阿蘇の草原を守るということは都市の方々にしてみれば、生きるのに重要な水を守ることに繋がっていると思います。まあ、こういうことも踏まえていろいろと議論していただきたいなあと思います。



Q: CVMという研究で、阿蘇の草原の景観に500円～1,000円使っても良いという結果が出ている。阿蘇の風景が地域の営みによって作られているということをソフト面で伝えていけたらいいのではないか。

A: 【CVM】今の状態で維持されるという条件を置いた場合、阿蘇に来るのにいくら使えるのか、また昔の草原を取り戻せるとしたらいくら払えるか等を含めて景観の価値を出す研究手法。立場の違う人同士で議論すると良い案が出来るのではないか。研究結果を利用していききたい。

Q: 13年度から一部伐採して植え替えるという政策が進められているが、指定林が多くなかなか進まない。組合は焼き払って広葉樹に変えてしまいたい希望がたくさんある。またミルクロードからの草原は筑後川の源となっているが、県の方ではその認識が薄いのではないか。

A: 短期的にやりすぎた政策の欠点であり、反省する点である。筑後川についても今まで認識が無かった。

高森は水源の集中している地域であり、熊本だけでなく、宮崎・大分の源ともなっている。広域的に考えいろんな課題に取り組んでいくとよいのではないか。

新しくNPO団体を立ち上げなくとも、本日のシンポジウムのように、今ある団体（デザインセンターやグリーンストック等）が合同で、民・官・企全体で取り組んでいけたらよいのではないか。

Q: 景観を守ろうという考えがある。美しいから残そ

うではなく、利用しなければ残らないと思う。牛を飼わなければならないのはなぜか？食だと思う。しかし、重原と食が繋がっていないので、その研究をしている。草を食べた牛は食卓にあがらない。外国産の霜降り肉が多い。草を食べる牛のブランド化、また食についてアピールすれば草原は維持できると思う。

A: 神戸牛をこの前もらってきたが、もともとは熊本牛を太らせたものだった。しかし、油の濃いのは毎日食べられない。食卓と草原を結ぶのは大変な大事なこと。霜降り肉を食べた体は確実にどうにかなっていってしまう。オーストラリアの人たちは、毎日肉を食べるから、油ののっているものはあまり食べていない。やはり赤肉が一番である。

A: 2005年の愛知万博の仕事の中で、「食と農」というテーマも考えていた。役所は〇〇問題とすぐ問題を付けるがそれでは良くない。「食と農＝（食べる）（つくる）」という展開のしかたを検討していた。食べるということは大変なことというのをもう一度考えていける場をつくりたい。価値観をそろそろ変えるべきである。神戸牛などを毎日食べたいとは思わない。生産者のわかる肉を買うという、誰にでも出来る行動を取り組んでいくべきである。

Q: 阿蘇は赤牛だと思う。今もグリーンストックから肉を買って喜ばれているし、お歳暮等にも使っている。東京は今本物志向である。阿蘇のヘルシーさを求めている。東京でも赤牛を買えるようにしてほしい。

Q: 阿蘇の草原にたくさんの牛が増えることが結論である。大事なことは牛肉を食べると言うことで、経済につなげていかなければならない。チラシ一枚からでも熊本県全体に呼びかけるのがよいのではないか。オーナー制度が良いと思う。食べる側も安心できると思う。

屋久島でガイド料をとってやっている例のように、草原の活用利用ということでバス会社等と提携をしたり、観光協会を挙げて新しいツアー計画をしてはどうか。どうやって観光客からお金を出してもらえ

るか考えている。

A：バス会社との提携ではコースの開発と言うのがある。バスが阿蘇に入ってきたらガイドを交換するといったような工夫が大切である。

Q：肥後の赤牛を熊本市内で買うならどこで買えますか？

A：下通の『YOU YOU YOU』で買えます。
赤牛の食べられるレストラン一覧を見るとわかります。地元の人でも意外と知らないもので、もっと知らせる必要があります。



●第5分科会

テーマ

「草原に関する行政の取り組み」

発言者：高橋博人（九州農政局企画調整部企画調整課長）
浦田保憲（阿蘇地域振興局農業振興課草地畜産係長）
山田朝夫（久住町理事兼企画調整課長）
村中正義（山口県秋芳町観光商工課）

主体は地域住民。それを町村、省庁、官民が枠を越えて連携し支えていくことが大切

（高橋）

ではまず、行政として草原の取り組みについて、今回おいでの発言者の方々からそれぞれのお立場での行政の取り組みについて、ご報告いただきたいと思ひます。

（浦田）

地域振興局では、阿蘇の広大な原野は草原ではなくて牧野であると考えています。牧野とは生業を行っているところで、生業のないところを草原と区分けしています。牛で飯が食える経営を、牧野を活用しながら育成していくというのが我々の共通認識です。

地域振興局では、牧野の流動化が必要であると考えます。現在までの取り組みとしては、牧野や肉用牛の振興について平成12年の6月に検討プロジェクトを立ち上げました。これを受けて12月に肉用牛の振興



指針として阿蘇地域肉用牛生産新世紀計画を作成し、これに基づいて牧野の利用と畜産の振興を図っていくということを進めています。

昨年4月に牧野活性化センターというものを設置しました。それから昨年8月にはリモートセンシング調査を開始しておりまして、これは衛星画像情報による牧野の利用状況調査を行っています。また昨年1月に九州東海大学の協力を得まして、牧野新世紀フォーラムというのを行っております。これは先ほどの計画に対して産・官・学がどのように考えるかというフォーラムです。

牧野活性化センターでは、牧野の貸し借りの相談や仲介を行っており、これまでの相談件数は借り手から10件、貸し手から7件ありました。そのうち3件が実際に貸し借りがありました。それから、リモートセンシング調査ではこれを使って土地利用計画に着手しております。

昨年9月にBSEが発生して牛肉の消費が低迷していますが、これにより阿蘇の農家の生業が厳しくなり、牛を飼うことの意欲が減ってきて、これが回りまわって阿蘇の牧野が荒れていくということになります。一番身近に阿蘇の牧野を守っていくことは牛肉を一口でも多く食べていってもらうということではないかなあと思ひます。

（村中）

秋吉台でも川遊きはやっていまして、こちらでは



火道作りと言っています。秋吉台でも重要になっています。これがやはり非常に大変な作業になっています。ボランティアの呼びかけなども行っています。またイベントも行っています。今回で4回目になりますが、夜の山焼きを行ってまして、マラソン大会の前夜祭として行っています。

観光と農業の町ですが、特に観光にウエイトをおいており、秋吉台の入場者数は200万人にもなります。この秋吉台の自然景観を残していくには、やはり火道作りというのが重要になります。また秋吉台に関わる団体の活動も重要で、観光協会をはじめ自然保護協会、パークボランティアの会、山焼きのボランティアを募集しているわくわく村という、大変小さな集落なんです。地域おこしの活動を行っているグループ、とってもゆかいな秋吉台ミーティングといった団体が活動を行っています。

山焼きにつきましても、条件のいいときにはよく焼けますが、条件が悪いときには、くぼ地の底は焼け残ったり、クヌギなどもたくさん生えていて、火も強いということで残っていたり、竹やぶもあつたりします。

一番は、やはり火道作りができるかどうかということになりますが、恒久的な火道作りを行っていくのが大事ではないかと思っております。

(高橋)

中山間地域直接支払いについてですが、草地での

適用は熊本県では阿蘇郡だけで、13年度の交付金額は阿蘇郡町村で平均5300万円、合計で6億3300万円が交付されています。この中で産山村の下田尻集落の事例は全国的にも有名であり、9戸で集落協定を結んでいるわけですが、野焼きや輪地切りなどを行う人の作業賃金を直接支払の共同部分で担っています。また草地機械のリース料や草地の更新費用などもここから出しています。デカップリングと言われるこの制度は、導入に当たり国会でも非常に議論されたんですが、導入後はきちんと活用されていると思います。

農水省としましては、BSEの問題などの対応をしっかりとしないといけないと思います。10月18日以降は安全に供給できるシステムが確立されたわけですが、まだ表示等の問題で消費が低迷していることは、皆様もご承知のとおりであります。その中で、産山村のさわやかビーフさんに代表されるように、阿蘇地域での顔の見える牛肉生産というのが非常に伸びているという現状もあります。顔の見える、地産地消の取り組みを広げることは、消費者の方々も望んでいると思いますし、農水省も一生懸命やっています。

日本の財産である、すばらしい阿蘇の草原を守るには、農業・畜産を守るということですから、そのためにも地産地消に代表される生産者の顔の見える取組、農家と消費者が直接対話できること、議論できることが必要であると思います。

それでは、これらの発言を踏まえまして、行政のあり方、方向性について、皆さんで議論していきたいと思います。



Q:行政間の横の連携がない。もっと動きを自由に活発にするのが課題ではないか。

A: (環境省ヒデタ・オカノ) 行政の横の連携は重要、組織を動かす人による部分が多い。草原は農業の場であるとともに、実際には、色々な価値がある。これまでは、農業者だけに負担を押し付けてきた部分があるが、農業が上手いかなくなった現在、価値を享受している人が皆で手を貸していくべき。環境省では、これまでの自然公園法は、原生的な自然を守ることから、手を入れる管理の方向も加える法改正を検討しているところ。自然、風景、景観など住民の営みを後押しする形で他省庁とも連携して、自然環境を保全していく。

A: 最初に草原ありきで始まるのはおかしい。草原の景観を維持しているのは農業であり、農業経営を守っていくことが重要である。

A: (高橋) これからの行政は、縦割りではやれない時代である。行政の常識は非常識と考えるような気持ちで仕事に取り組んでいきたい。

Q:農林業は疲弊している。情緒的な話と農業や林業の実態とは、乖離しているのではないか。

A: (高橋) 農業の現状を都会の人は余りにも知らない状態であり、啓発活動の必要性を感じている。正しい情報を幅広く伝えるよう努力している。

Q:牧野と草原を区別して話されているようだが、違いが分からない。

A: (浦田) 改良草地は、草原ではなく牧野であると認識している。

A: (山田) 畜産利用されているのを「牧野」、それ以外を「草原」と分けてしまうことが、発想の柔軟性を阻害している。「牧野」も例えば「景観」とか「自

然環境」とか「教育の場」という価値を有している。草原の「多面的機能」に着目する必要があると思う。
Q:農の現場を子どもたちが知らないのなら、文部科学省との連携で教育的にアピールすべきではないか。
A: (高橋) 子どもたちの教育については、総合学習の時間に農業の勉強が出来るよう様々な取り組みを教育現場と連携して行っているところである。

(一般) 農業で草原が維持できている阿蘇がうらやましく感じられる。火入れは文化であり、文化を守るためにも行政が草原の維持管理に対して手を差し伸べて欲しい。

(南小国町長) 畜産農家が減ってきており、その維持管理に行政が手を差し伸べてきたが、中山間地域への直接払い制度の開始は、以前から要望してきたことであり、非常に助かっている。言葉使いの話であるが、野焼きという言葉は一般的には、外でゴミを燃やすことというような使われ方をしており、誇りを持って野焼きを実施している自分たちは、憤りを感じている。今後、使い方を正していく必要があるのではないか。

(一般) 阿蘇の草原は誰が守っても良いという発言があったが、実際には、畜産業が頑張っているから守られている。畜産がすたれたら、ボランティアなど他の手段では、絶対守っていかない。

(高橋) もちろん守る中心となるのは畜産業であることは疑いの無いことであるが、国民の財産という視点では、今後は、それ以外もありえるのではないかと。

(一般) 今からの阿蘇を守るのは、農業であり、農家の人たちは、豊かさを感じて欲しいし、外からのボランティアの受け入れ等柔らかい視点を持って欲しい。行政は、草原を守るコーディネーターや窓口などの部署を作って、農業を誇りに思えるようにして欲しい。

(波野村 後藤課長) 畜産業の衰退に伴い植林化が進んでいるが、手入れも十分でなく災害の危険性があると思われる。畜産業の振興のためには、「地産地消」という生産者の顔が見える取り組みを今後行っていく必要がある。

【最後に一言ずつ】

(山田) 第1回に久住で開催してから、本日の第5回を開いて、問題意識が出てきたことや、草原に対する認識が進んだことが感じられ、非常にうれしかった。今後も、続けていって欲しい。

(浦田) 都市や農村には、土地利用計画があるが、牧野に関してはなかった。行政としては、牧野の土地利用計画について今後検討していきたい。

本日の議論では、実際に住む人たちの考えを踏まえたものとは言えない状況である。やはり、住む人たちがどう考えているかを出発点とすべきかもしれない。

(高橋) BSEの問題もあり、畜産業が非常に厳しい。行政は、農業者や消費者のやりたいことを支援していく立場であり、農林水産省も環境省、文部科学省等と連携し、農業の多面的機能への理解を深める取り組みや食農教育への支援等色々なことをやっていきたい。

分科会報告会

コーディネーター 瀬田信哉（財団法人国立公園協会理事長）



●第1分科会

放牧の必要性、活用方法について意見交換を行なった。

モーモー輪地切りの報告では、囲いを鉄柱に変えてみては、といった意見が出された。

草原らしい牛の飼い方について、畜産農家だけの問題ではなく農業全般で考える必要があるとの意見でまとまった。

結論としては、みなさんの知恵を貸していただき、もっとよい草原の活用活性化に取り組みたい。

●第2分科会

BSE問題はあるが、井さんの牛は売れている。消費者と直接交流を行なっている。農村に対する不安感が牛を買わなくしているのではないか。

担い手問題では、誰かがなんとかする、阿蘇の食文化と結びつけて金儲けをする。

阿蘇や草原の価値を畜産農家以外で考えていくべきである。

結論としては、みんな井さんみたいになろう。農業をしている人を再評価してみよう。

●第3分科会

平坦部の牛を草原に放牧する取りくみが6年まえから阿蘇が取りくみ、全国に広がっている。

阿蘇の水源地は筑後川にもながれていることから、福岡への情報発信をもっとするべきである。

阿蘇の野焼きボランティアは都市の人が草原を楽しみながら手伝いをし、地元の人と交流していくことが長続きする方策である。

高森町牧野組合は、ボランティアに触発されて組合以外の住民を巻き込んで取りくんでいる。これから大学なども巻きこんでいきたい。

人と自然と家畜、地域同士、都市と農村と行政、それぞれがパートナーシップを取り、精神的パートナーから経済的パートナーとしていく。

●第4分科会

筑後川の源流が集まる地域での情報発信、外輪山の内側の観光バスは地元がガイドするなど、ひとりひとりが何ができるかを考えていけばよい。

目指せ5万頭！

●第5分科会

牧野と草原は区別して考えるべきである。草原を守ることは、誰がなぜ、何のために守るのが、草原の意義を明確にしなくてはならない。その中で、縦割り行政の問題など行政が取り組むべき課題はたくさんある。



サミット及びサミット宣言の採択



第5回全国草原シンポジウムで討議された成果の集大成として
参加市町村長による討議を踏まえサミット宣言を採択する。

阿蘇町長 河崎 敦夫

全国から、また郡内から市町村長をはじめたくさんの方にご出席いただき、第5回全国草原シンポジウム・サミットを開催することができました。本日は午前中、雨の中を基調講演や分科会、各地の報告など盛りだくさんで、内容の濃い討議であったと思います。特に分科会では過去4回の成果を踏まえつつ、各地区でのそれぞれの取り組みを具体的に討議できたのではないかと思います。

繰り返しになりますが、昨今のBSE問題では牛肉に対する不安から安全性に対する消費者のこだわりや信頼関係というものの期待が非常に高まっていると思います。一方、草原の保全等においては関係各位の努力により改善、改良されてきているものと思っております。

関係者の方々の今までの真摯な取り組みを見ますと、いよいよ草原問題も住境を迎えたと思っておりますが、どうか各位の積極的なご答弁をいただくとともに、このサミットにおいて宣言が採択されるものと思いますけれども、多くの成果が得られることを祈願いたしました。町村会から代表して挨拶させていただきました。本日は誠にありがとうございました。



司会進行：(財)阿蘇地域振興デザインセンター事務局長 坂元英俊

ありがとうございました。ここで、本来であれば今回ご出席いただきました市町村長様おひとりおひとりご挨拶をいただきたいところではございますが、時間の都合上お配り致します名簿と名札によりご紹介に代えさせていただきます。誠に申し訳ございません。

次に、座長の選出でございますけれども、出席者のお許しを頂ければ、事務局の方で座長をご指名したいと思います。皆様よろしいでしょうか。(拍手)

ありがとうございます。それでは、小国町長の宮崎様に座長をお願い致します。宜しくお願い致します。

〈座長挨拶〉

小国町長 宮崎暢俊

ご指名いただきましたので、第5回全国草原シンポジウム・サミットの座長を務めさせていただきます。今日の天候は非常に野焼き日和ではないかと思っております。野焼きの火入れの許可は各町村長がするようになっていまして、いい野焼きになるのではないかと考えております。

それぞれの自然環境はそこでの暮らしが反映しておりまして、ヨーロッパの草原も以前は原生林だったのが、人口が増え食生活が向上し、畜産の振興により牧野に変わっていったのだと思います。阿蘇の草原はまさに牛を放牧するという生業の中から維持

されてきたと思っておりますし、暮らし方の変化や経済効率が変わっていく中で非常に維持管理が難しくなってきた状況にあるのではないかと感じております。

今日は、阿蘇の12町村の中から代表して3町村の首長様から草原の関わり方や取り組みについてお話しさせていただきたいと思っております。

南小国町長 河津 修司

私どもの南小国町は黒川温泉のあるところと言った方が皆様にはわかりやすいかもしれません。南小国町には阿蘇の32%の草原がありまして、31の牧野組合が管理しております。夏山冬里方式を採用して、その関係で27の牧野組合が野焼きをしています。以前は7割ある農家の大半が牛を飼っていたのですが、今は農家が3割に減ってなおかつその30%しか牛を飼っていないという現状にあります。そのため野焼きをするのも大変な状況にあります。しかし、牧野組合に加入している人たちというのは、大部分が牛を飼っていない人たちなのですが、その人たちがなぜ野焼きをするのかというと、この草原を自分たちの代で終わらすことはできない、先祖の遺産として草原を守っていかなくてはならない、といった使命感でみんなで協力して野焼きを行っているのです。とはいっても、非常に難しい状況にはありますが、グリーンストックなどのボランティアをお願いしながら、一部では野焼きボランティア制度を利用して行っています。また、馬を利用した取り組みも今試験的に行われているところであります。

この阿蘇には120万人の観光客があります。このお客様は雄大な草原を見て心を和ませて帰られます。そういった意味で、この草原を観光にも利用していきたいと考えております。しかしながら、我々だけでできることではありませぬので、阿蘇の町村長や県などのバックアップにより、協力して取り組んでいければと考えております。

波野村長 市原 新

今回のシンポジウムにつきましては、草原の維持管理の難しさ、あるいはその取り組み等につきましていろいろなお話が出されておりましたが、波野村におきましても同じような問題、課題を抱えております。その状況についてお話ししたいと思います。

波野村は阿蘇外輪山の東部に位置しておりまして、標高が600Mから900Mの高地であります。以前は一面ススキの草原であったと言われております。村の70%が植林による山林で、かつてはあか牛の産地でありましたが、牛肉の自由化などによる畜産農家の激減、草原の周りを山林が囲む立地など苦慮しているところでもあります。草原は山林に囲まれ野焼きが難しいところです。モーモー輪地切りは非常に参考になりましたが、畜産農家が激減している中で、対応が非常に難しい状況であります。私どもも行政として畜産振興に力を入れておりますが、国におきましても畜産振興に力を入れていただきたい。

また、波野村には野草の絶滅危惧保護地区が3ヶ所ございまして、そのひとつにスズランがあり、現在5万本のスズランを保護しております。このスズランは大変珍しいと言われております。この他にも多くの希少植物が自生いたしております。このような植物についても、関係機関の先生方のご指導をいただきながら、保護していきたいと考えております。また、そこに住む方々や訪れる方々のご理解が大変重要であると考えております。これら希少植物をこれからどうやって後世に残していくのか、我々に課せられた問題、課題ではなからうかと考えております。いろいろな方からのアドバイスをいただきたいと思っております。

西原村長 加藤 義明

西原村のキャッチフレーズは東京に一番近い村ということになります。役場から熊本空港まで車で5、6分で行きます。それから羽田空港まで1時間半かかりますので、2時間で都心にいるのではないかと、そういう意味では非常に便利なところにいるのではないかなあと思います。逆に東京から2時間でこのような大自然があるというのは非常にすばらしいことではないかなあと感じております。西原村は草原が100ヘクタールほどございまして、放牧してい

嵩のは半分くらいで、残りは観光風景として開放しています。観光客の方に大自然を満喫していただいで、変化する自然の姿を見るのはとてもおもしろいと考えております。今年も3月に原野一帯の野焼きを実施いたしました。野焼きをすると「牛道」が見えてきます。草が茂っているときは見えませんが、野焼きをすると牛が草を食べていった道が急斜面に見事に現れます。まさにこれは芸術そのものだなあと感じます。その後、山菜の宝庫でありますワラビ、セコマイが出てきて、野の花が一斉に咲き出します。調べましたら75種類の野草が見つかりました。夏から秋にかけても見事な姿で、秋にはしゅうたんを敷いたような絶景であります。

そんな日々の移り変わりを見れるのは特権かなあと感じます。この感動を末端の人たちに味わっていただ

きたいと思います。我々もそういった取り組みを実践しています。草原には人を和ませる計り知れないエネルギーがあるのかなあと考えます。

我々の村の草原は柵がありません。バリアフリーな状態で誰でも入って草原を楽しんでいただきたいと思いますが、最近モトクロスバイクなどで荒らされたりもしており、非常に残念ではございますが、このようなことにも対処していかなくてはいけないと考えております。

とにかく多くの方に大自然を楽しんでいただくための取り組みをこれからも行っていきたいと考えておりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

サミット宣言

阿蘇のカルデラを中心にして、その周囲を広大に取り巻く草原は、古代からの人々の営みにより大切に守られてきた大いなる財産です。また、阿蘇を訪れる人々にとっても日常に氾濫する騒音や喧騒から離れ、心地よい風を受けながら、自分自身を解放する癒しの場にもなっています。

大自然の循環を受け持つ最上流の草原から育まれた雨水のひと粒ひと粒は、小さな沢から、やがては清冽な大河の流れとなって下流域を潤し、多くの恵みや生命の源にもなっているのです。

しかし、この草原も農畜産業の不振により、かつての輝きに満ちた緑の形成が失われ、草原の維持さえも危機的な状況が生まれようとしています。このような状況の中で徐々に草原が持つ多面的な価値が見直され、草原の再活用に対する取り組みや草原を維持するための新たな技術が芽生えてきました。残念ながら、肉食糧の中心となる牛肉は、BSE問題で全国的に大きなダメージを受けていますが、粗飼料多給型の「草原牛」は安全性の面で高い期待が寄せられており、「草原牛」の供給体制の強化は、減少する草原復活の国民的理解を得る契機として捉えることができます。

阿蘇の地で開催された第5回全国草原サミットは、過去4回の成果を振り返りながら、これをひとつの節目として位置づけ、今日の草原をめぐる様々な問題について、あらゆる角度から議論をおこない、次の点について意見の一致をみしました。ここに「阿蘇宣言」を採択し、これまで以上に各自治体をはじめ、諸団体との連携を強化するとともに、その実現に向かって積極的にかつ具体的に行動していくものとし、

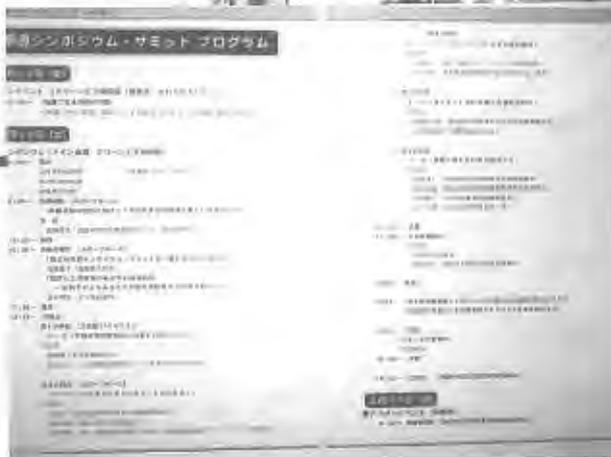
阿蘇宣言

1. 草原の維持・存続には、草原を活用した農林畜産業、草地酪農の一層の振興を図るとともに、地産地消運動を繰り広げ、都市住民および消費者と農村の連携を強化しながら農村の活性化を進めます。
2. 草原は、森林とともに水源涵養、環境浄化などの機能を有し、水系の源となっています。草原の維持は流域全体の問題でもあることをアピールし、財政的支援を含めた草原維持のための理解と協力に取り組みます。
3. 野焼きの実施を担う牧野組合員等の高齢化や減少傾向が顕著になりはじめました。安全で効率的なモーター輪地切りなどの実証試験の結果を踏まえながら、一層の省力化を図るとともに、輪地切り野焼きボランティアへの参加・協力・支援について都市住民の理解を深めます。
4. 草原が持つ多面的な価値の評価について認識を深め、その重要性に着目して、景観の維持、希少動植物の保護管理体制の充実、さらに草原のツーリズム、バイオマス利用等への多面的利活用による草原活性化のために地域住民と都市住民および行政が連携し積極的な取り組みを展開します。
5. 本サミットの存続ならびに自治体および諸団体の連携強化、また全国的な組織の拡充を図り、宣言内容の実現に全力であたります。

次回開催地
長野県蓑ヶ峰高原



イベント、交流会、 アフターイベント スナック





「阿蘇の草原」歌詞募集の結果報告

昨年、11月30日まで募集を行い138通の応募があり、最終選考を2月15日に行い、グランプリ1作品、入選1作品、佳作3作品、特別賞5作品を以下のとおり、10作品を決定しました。

当初5作品の入選作品でしたが、すばらしい作品が多かったため、特別賞を5つ追加しました。



グランプリ

「草原仲間」

芦田 茂 大阪府高槻市

入選

「草原さんの歌」

本多 春定 熊本県阿蘇郡阿蘇町

佳作

「阿蘇の草原 いのち輝け」

松本 けさみ 熊本県阿蘇郡長陽村

「煌いて阿蘇」

牛原 豊雄 熊本県山鹿市

「あゝ阿蘇の草原」

二紀 京二 岐阜県多治見市

実行委員長特別賞

「阿蘇の草原」

曾我 登喜子 熊本県阿蘇郡西原村

熊本県阿蘇地域振興局長賞

「共に愛して」

駒井 暁 大阪府東大阪市

熊本県畜産農協阿蘇支所賞

「草原からの便り」

一ノ瀬 真佐子 熊本県菊池郡西合志町

南阿蘇畜産農業協同組合賞

「みどりのステージ」

南 英市 滋賀県近江八幡市

久木野村長特別賞

「ゆこう草原に」

山下 颯 熊本県上益城郡益城町

● 「阿蘇の草原」歌詞募集グランプリ

草原仲間 ～阿蘇の草原～

作詞：芦田 茂

- 1 阿蘇の草原 草千里
ひろがるみどりの その中で
南あかるい 日をあびて
群れて草はむ 牛たちと
遊んでみたいな のんびりと
おーい 仲間にしておくれ
草原仲間にしておくれ
- 2 どこまでもつづく 草千里
空と大地の さかい目が
波うつような 草原の
朝日 夕日に ぼら色に
そまる浮き雲 牛の群れ
おーい 仲間にしておくれ
草原仲間にしておくれ
- 3 みどりつらなる 草千里
いろとりそえる 牛の群れ
カルデア地球の えくぼなら
自然がそのまま 生きている
草原心の オアシスさ
おーい 仲間にしておくれ
草原仲間にしておくれ

《コメント》

草原を愛する気持ちを草原と一体感をもたすため、草原仲間として表現しました。

大阪府高槻市 芦田 茂

大庭照子さんによる「阿蘇の草原」の歌 発表会

3月16日（土）18：20からの交流会のなかで発表

今回グランプリを取った芦田茂さんの「草原仲間」に熊本県出身の竹口美紀さんが作曲した。さらに日本でも有数の童謡歌手の1人で、開催地の久木野村にある「日本国際童謡館」の館長でもある大庭照子さんが第5回草原シンポジウム・サミットを記念し、阿蘇のおおらかな大地のもとで歌いあげた。

○うた

大庭照子

熊本県出身。フェリス女学院短期大学音楽科卒業。

1970年より“NHKみんなのうた”で「小さな木の実」「詩人が死んだとき」「こわれそうな微笑み」を歌う。「大庭照子スクールコンサート」を全国で開催し、のべ2500校となる。

1975年大庭音楽事務所を発足。世界各地よりクラシック及びポピュラーアーティストを招聘。国内イベントの企画制作を行う。

1994年阿蘇郡久木野村に「日本国際童謡館」を設立。館長を務める。

2000年12月より2001年4月まで西日本新聞「聞き書きシリーズ」に「阿蘇からの風」が95回連載される。

○作曲・演奏

竹口美紀

熊本音楽短期大学器楽科電子オルガン専攻卒業。ヤマハ音楽教育システム講師を経て、自然をテーマにした作曲・演奏活動家として独立。テレビ・ラジオなどの音楽制作も担当している。



阿蘇の野焼き

「荘といわんか美といわんか」

1 千年の営みが、阿蘇の風景を紡いでいた。

【九州のムラ】11号 シリーズ1 阿蘇の風にふれる旅より抜粋

弊誌九州のムラの読者アンケートでは毎号、「九州で好きな場所は」という質問をしている。天草、久住、湯布院、平戸、国東半島、それに奄美・屋久島・対馬・五島列島などの離島、といった観光地の常連を抑え、圧倒的に多いのが「阿蘇」である。中には大観峰、南阿蘇、ミルクロードなどのように阿蘇でも特にお気に入りの場所が書いてあるものもある。

地図を眺めていると九州は、なんとなく浴衣を着たおじさんが裾を捲り上げ、踊っているようにも見える。そのちょうどお腹のあたり、『九州の臍』と呼ばれる蘇陽町も含め、これら上部に広がる「阿蘇」は九州の中心部にあたり、まさに九州人に



全域を一気に焼くのではなく、飛び火による火災、人身事故などの恐れが強い場所から先に焼く。

とって心の故郷なのかもしれない。

阿蘇では現在、グリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムなど様々なツーリズムへの取り組みが行われている。それは阿蘇で暮らす人々や地域の風景、風俗、風習、風味、風物、風格、風情といった『風』に触れる旅でもある。

かの民俗学者柳田国男、折口信夫両氏は、干し飯をほぐす湯や暖をとる火を借りること、つまり「他火」が「旅」の語源であるとした。見知らぬ土地でムラ人と同じ火を囲み、その暖かさにふれ、



野焼きは、指揮をとる人、「火ひき」と呼ばれる火をつける人、それに火消し役が必要。火ひき千人に対し、火消し役は約10人。火消し役は割竹をかざらずに編んだ「火消し棒」で火を撫でるように押さえつけて消していく。

また歩いていく。人は昔から旅によって、生命に温もりを吹き込まれていったのかもしれない。

第1回目の「阿蘇の風に触れる旅」は、春の風物詩『阿蘇の野焼き』である。毎年3月上旬から、春の彼岸の時期にかけて阿蘇の草原は野火につつまれる。阿蘇の人々は、古くは平安時代から牛を飼って生活していたという。春から夏は牛馬を放牧して青々とした草を食ませ、秋から冬は採草地で刈った草を干し草にして飼にしてきた。草原を放牧地として、また採草地として利用してきたのである。

もともと阿蘇は火山灰土壌で栄養分が少なく、しかも高冷地でもあり農業をやるには厳しい条件のところである。その土地で人々は、家畜の糞尿を敷薬にまぜて厩肥（肥料）を作り、刈敷（草を刈ってそれを緑肥としたもの）とともに水田の肥料として肥沃な大地を作ってきた。水田一反（約10アール）の米を作るのに草地3～4反は必要だったという。まさに草原が人々の暮らしを支えてきたのである。

その草原を阿蘇に暮らす人々は集落で守ってきた。草原は個人で所有するのではなく、「入会地」と呼ばれる共同利用地を集落ごとに設けた。それと同時に入会地を維持管理していくために「野焼き」などの作業が義務づけられた。そして、家畜の放牧や採草などの作業を円滑に行う牧野組合を組織した。

野焼きは牛馬の飼育に必要な柔らかく良い草を育てるために行われるものだが、牛の体に付くダニの繁殖を抑えたり、山火事の発生を防ぐ役割もあるという。野焼きをせずに放っておくと草原は数年で低木が茂って藪となり、火事になると大変危険となる。そして草原は荒れた原野となり、やがて森林となってしまう、多くの人々を惹きつけてきた阿蘇の原風景も失われてしまうのである。

つまり、入会地を中心としたムラ社会やムラで暮らす人々が一千年にわたって阿蘇の風景を守ってきたのだ。

野焼きは大自然が相手である。それだけに非常に危険な作業でもある。「風」を読み、「火」や「草」、「木」の性質を知ったうえで、阿蘇の「地形」を利用しながら焼いていく。それはまさに先人達から營々と受け継いできた阿蘇の技なのである。



昭和40年頃から近代農業が進み、厩肥、緑肥は化学肥料に変わり、水田を耕す牛もトラクターに取って代わって農家は牛馬を手放していった。現在、草原は肉牛や乳用牛を生産するための採草地、放牧地としての利用が主流である。



昭和30年頃の阿蘇の草原の風景。刈った草を牛の餌にのせ歩いた「草の道」が残っていた。



枯草の背丈が高いと火の立ち上がりも大きい。火の燃え移る速度は速く、一瞬にして燃え尽きよう。



牛肉の輸入自由化により畜産農家の減少は顕著となり、さらに過疎化、高齢化も進み、近年、野焼きの道徳が困難な状況となっている。そこで都市住民にボランティアとして野焼きに参加してもらい、草原保全への関心を高め、あわせて労力確保する取り組みが行われている。
問い合わせ先／「阿蘇」阿蘇地域振興デザインセンター TEL 095712214601

2002.3.15-17



第5回全国草原シンポジウム・サミットin阿蘇